



Data

監督：大林宣彦

出演：厚木拓郎／細山田隆人／細田善彦／吉田玲／成海璃子／山崎紘菜／常盤貴子／小林稔侍／白石加代子／武田鉄矢／高橋幸宏／尾美としのり／南原清隆／片岡鶴太郎

👁️👁️ みどころ

大林宣彦監督が、本作公開予定日前日の4月10日に死去！新型コロナウイルス騒動のため公開延期とされていなければ、大勢の観客と共に劇場で大往生！神サマは、なぜそんなシナリオを描いてくれなかったのだろうか・・・？

それにしても、“歌って、踊って、ボリウッド！”のお株を奪った本作は、まさに映像作家・大林宣彦の集大成！もっとも、私には宝物いっぱい“玉手箱”より、“おもちゃ箱”や“びっくり箱”をひっくり返した、という形容の方がピッタリ！冒頭のイメージは、監督自身が乗った黄泉の国へのスペースシャトルと重なる面も・・・？



■□■映像作家・大林宣彦のすべてが本作に！■□■

私の故郷は愛媛県松山市だが、大林宣彦監督の故郷は広島県尾道市。そんな大林監督の遺作となった本作に登場するのは、「瀬戸内キネマ」だ。そんな名前の映画館ならホントにあってもおかしくない。松山市で高校3年生まで過ごした私には、実に覚えやすく親しみやすい映画館の名前だ。

しかし、中高校時代に松山市内で私が通っていた3本立て55円の映画館が1970年代に次々と閉館していったように、今、瀬戸内キネマも興行納めとして、日本の戦争映画のオールナイト上映をやるらしい。周防正行監督の『カツベン！』（19年）はメチャ面白かったが、そこでの物語は、私にとっては歴史上の物語（『シネマ 46』157頁）。しかし、本作は私が中高校時代に体験した映画館通いの喜びと、あの時代のノスタルジアが満載。

末期がんの宣告を受けながら、何とか本作だけは！そんな執念を見せた大林監督の映画愛が詰まった本作のタイトルに納得！まさに、映像作家・大林宣彦のすべてが本作に！

■□■歌って、踊って、大林映画！■□■

「ボリウッド映画」とも呼ばれるインド映画は、“歌って、踊って、ボリウッド!”が売り。近時は「シリアスもの」も増えているが、先日観た『WAR ウォー!!』(19年)もその一つだった。『スパイ・ゲーム』(01年)、『シネマ1』23頁)と同じようなシリアスなスパイもの、アクション映画でありながら、突如歌って踊ってのシーンに転換するところが、いやはや・・・。

大林監督がそれをまねたわけではないだろうが、本作では新ヒロイン・希子役に抜擢された吉田玲をはじめ、3時間にわたって、戊辰戦争から原爆投下までありとあらゆる戦争にタイムスリップしていく馬場毬男(厚木拓郎)、鳥鳳介(細山田隆人)、団茂(細田善彦)の三人組もステップを踏むことになる。

もっとも、ボリウッド映画のそれは、長い伝統の中で培われてきた芸術だから、そのレベルはメチャ高い。しかし、今ドキの日本の若者がにわか仕立て(?)で見せるタップダンスとミュージカルのシーンは、ハッキリ言って学芸会に毛の生えたレベル・・・?

まあそれはそれでよし。本作はダンスや歌の上手下手よりも、大林監督の描く戦争観(厭戦観)を楽しく、かつ正しく理解することが肝要なのだから・・・。

■□■龍馬はどこに?中原中也はどこに?■□■

黒木和雄監督の『竜馬暗殺』(74年)、『シネマ39』未掲載)は、シリアスさと漫画っぽさを両立させた面白い「龍馬もの」だった。また1982年に放映された、『幕末青春グラフィティ 坂本龍馬』と題されたテレビドラマは、きっと若き日の龍馬の実像は司馬遼太郎の『竜馬がゆく』のようなカッコいいものではなく、こんなレベルだったのだろうと納得させてくれるメチャ面白いドラマだった。しかして、今や坂本龍馬役と言えば武田鉄矢と相場が決まっているが、本作で武田鉄矢演じる龍馬はどんな場面に登場するの?

他方、大林監督の前作『花筐/HANAGATAMI』(17年)、『シネマ41』67頁)は、私の大好きな作家、檀一雄の『花筐』を映画化したものだった。そこでは、1941年当時の4人の大学予科生が主人公だった。そして、そこでは、1903年当時の藤村操が華嚴の滝で投身自殺したことが青春群像劇の一つの象徴として描かれていたが、本作には中原中也の詩が頻繁に登場する。エンタメ作品に純文学やクソ難しい詩が必要か否かは難しいところだが、大林監督にはやはり藤村操や中原中也がよく似合う・・・?

■□■玉手箱より、おもちゃ箱、びっくり箱の方がピッタリ?■□■

「玉手箱」と言えば、日本人なら誰でも、浦島太郎の童話で、乙姫サマから、「決して開けないように」と言われて渡された玉手箱を、我慢できずに開けてしまったという物語がすぐに頭に浮かんでくる。また、その玉手箱にどんな宝物が入っていたのかも、日本人なら誰でも知っている。しかし、ビックリ箱は?おもちゃ箱は?

本作の副題は「キネマの玉手箱」とされているが、私には玉手箱よりビックリ箱やおもちゃ箱の方がよりピッタリくる。それは、本作が「おもちゃ箱をびっくり返したような」という形容がいかにもふさわしい映画だからだ。玉手箱と言えば、その中にはいっぱい

宝物が整然と入っているイメージだが、本作は決してそうではない。なぜなら本作は、3時間にわたって次から次へと、これでもかこれでもかと、おもちゃ箱をひっくり返し続けるような映画だからだ。

冒頭の宇宙船の内部はわかったようなわからないような世界観から始まるので、少し違和感があるが、本作のメインとなる瀬戸内キネマが登場し、そこでのオールナイトの上映が迫ってくるストーリーになると、俄然緊迫感が増してくる。そして、あの戦争、この戦争が、多少煩わしい字幕によるキーワード解説と共に始まると、まさにそれは歴史の、そして戦争のおもちゃ箱を大林流にひっくり返した世界になっていく。

■□■公開前日の大往生をどう考える？■□■

私は大林監督の初期の出世作となった『転校生』（82年）、『時をかける少女』（83年）、『さびしんぼう』（85年）をリアルタイムの映画館で観ていない。それは、当時は私が弁護士として最も忙しい時期だったからだ。その後も大林監督作品はあまりフォローしておらず、近時観たのは、『転校生—さよなら あなた—』（07年）（『シネマ15』350頁）、『22歳の別れ Lycoris 葉見ず花見ず物語』（06年）（『シネマ15』402頁）、『花筐／HANAGATAMI』程度だ。そして、創造的な映像作家・大林監督の価値は認めているものの映画自体は特別好きなわけではなく、また、厭戦表現が時として鼻につくこともあった。

しかし、末期がん宣告の中で、遺作と思っていた『花筐』の後、さらに本作の演出に乗り出したことに驚くとともに、その映像作家としての根性・執念に驚いたものだ。ところが、大林監督は本作の本来の公開予定日だった4月11日前日の4月10日に亡くなってしまった。そこには、きっと新型コロナウイルス騒動によって公開延期になったことのショックがあったはずだ。公開初日に劇場で大勢の観客と共に本作を鑑賞し、その直後に大往生！神様はなぜそんな理想的なシナリオを実現してくれなかったのだろうか？

他方で、全く別世界ながら、去る8月2日には序二段まで地位を落としていた元大関・照ノ富士が幕の内最高優勝を果たした。強い時の照ノ富士とケガで苦しむ照ノ富士の両者をしっかり見ていた私としては、この奇跡の復活に大拍手！これを見ていると、一時的に神様の目（興味）が映画界から相撲界に目移りしていたのかも・・・。

2020（令和2）年8月5日記